

原著

幼児紙芝居の普及における二つの研究会が果たした役割

佐々木 由美子¹⁾・相澤 京子²⁾

Efforts to Promote “Youji Kamishibai” by Two Research Groups

Yumiko Sasaki and Kyoko Aizawa

要約

現在、保育現場で活用されている紙芝居は、昭和初期におこった街頭紙芝居をもとに、保育教材として発展したものである。低劣、俗悪と批判されていた紙芝居が、昭和10年代に急速に保育現場に普及し、20年代には「紙芝居中毒を起こしている」と批判されるほど日常的に活用されるようになっていく。その急速な普及の背景には、幼児に向けた紙芝居とは何なのか、保育における紙芝居とは何なのかを真剣に追究し、研究や制作を行った保育問題研究会や日本教育紙芝居協会の働きがあったのではないだろうか。本論文では、これら二つの研究会に焦点をあて、どのような研究や活動が行われ、紙芝居の普及にどのような役割を果たしたのかについて考察した。

キーワード：教育紙芝居、保育問題研究会、日本教育紙芝居協会幼児部会

1 はじめに

(1) 問題の所在

現在、保育現場で活用されている紙芝居は、1930（昭和5）年に誕生した平絵の街頭紙芝居を母体として発展してきたものである。子どもたちからの絶大な支持を受け全国に広がった街頭紙芝居は、1933（昭和8）年には東京全域だけでも2000人の紙芝居屋が存在し、1日に60万から100万人の子どもたちと接するほどであった¹⁾。それだけに、街頭紙芝居の内容に対する批判や、子どもにも与える影響を指摘する声も多く、社会問題化していく。

その紙芝居が保育に取り入れられたのはいつだったのか。「現在のスタイルの紙芝居が1930（昭和5）

年に成立すると瞬く間に、保育界でも紙芝居は取り入れられた²⁾とする言説は多いが、低劣、俗悪、卑猥、残忍、非教育的等々と批判された街頭紙芝居の印象が払拭され、保育・教育現場で日常的に用いられるようになるためには、かなりの困難があったはずである。

紙芝居を宗教教育に活用しようと、1933（昭和8）年から紙芝居刊行会を組織してキリスト教紙芝居の出版を手がけた今井よねにしても、1935（昭和10）年に「幼稚園紙芝居シリーズ」を刊行した高橋五山にしても、その普及には困難を極めている。キリスト教紙芝居を次々と出版し、順調に事業展開しているようにみえた今井だが「実際には経営困難に陥っていた³⁾とされ、努力は重ねられたものの事態は好転せず、1941（昭和16）年には、キリスト教と相容れない国策紙芝居の出版を手がけるようになった

1) 佐々木由美子 東京未来大学こども心理学部

2) 相澤 京子 鶴川女子短期大学幼児教育学科

ている。また、高橋五山も、幼稚園に営業に出向いても紙芝居への偏見から門前払いをされることが多く、「暫時製作は中止して、愛用者をつくるために啓蒙宣伝に力をそそぐことにした」⁴と当時を回想している。

筆者らは、当時の紙芝居をめぐる言説や幼稚園の指導案等から、保育現場における紙芝居の本格的な普及は昭和10年代中頃であると考えている⁵。紙芝居をめぐる言説をたどっていくと、保育現場に急速に普及した紙芝居は、昭和20年代には「紙芝居中毒を起こしている」⁶と批判されるほど、日常的に活用されるようになっていく。内山憲尚(1947)は、「保姆さんは、読んでやりさえすれば事足りる紙芝居の方が手数がかからず、すぐに出来るので、幼児が要求するがまゝに紙芝居を興え、かくして談話と云えば紙芝居のみが興えられる傾向になつて来る」と述べ、談話における「紙芝居偏重」を危惧している。

根強い偏見を払拭し、紙芝居がこれほど急速に普及した背景にはどのような要因があったのだろうか。川崎大治(1940)は次のように述べている。「保育所の保育の中でも、紙芝居があると無いとでは非常にちがふ。(中略)だが、現在商品として売り出されてゐるものには、教育的なものは少いが「日本教育紙芝居協会」や「保育問題研究会」では、保育の教具として、なかなか熱心な研究がつけられている」⁷。川崎が言及している保育問題研究会は1936(昭和11)年に、また日本教育紙芝居協会は1938(昭和13)年に設立された会である。保育問題研究会では第五部会が、日本教育紙芝居協会では幼児紙芝居部が中心となって、幼児に向けた紙芝居とは何なのか、保育における紙芝居とは何なのかを真剣に追究し、研究や制作を行っている。

本論では、これら昭和10年代に設立した二つの研究会に焦点をあて、どのような研究や活動が行われていたのか、また、保育現場への普及において、どのような役割を果たしたのかについて考察していきたい。

(2) 研究方法

保育問題研究会発行の『保育問題研究』および日本教育紙芝居協会発行の『教育紙芝居』のなかから、幼児紙芝居や保育にかかわる言説を収集し、分析していく。

2 保育問題研究会

(1) 概要

保育問題研究会は、1936(昭和11)年に法政大学児童研究所の城戸幡太郎らによって設立された組織である。保育問題研究会会則の第2条には、「本會ハ幼稚園・託児所等ノ乳幼児保育ノ諸問題ヲ研究シ、新シキ保育體系ノ諸問題ヲ研究シ、新シキ保育體系ノ建設、保姆ノ再教育ヲ目的トス」とあり⁸、乳幼児保育の諸問題の研究、新しい保育体系の形成と保育者の再教育が会の発足の趣旨であった。そのため、主な会員には、浦邊史、菅忠道、城戸幡太郎、乾孝、留岡よし子、松葉重庸、山村きよ、川崎大治、川田百合子、奈街三郎、松永健哉、木俣武、山下俊郎、波多野完治、副島ハマら、児童研究の専門家や作家だけでなく、保育の実践家100名ほどが名を連ねていた⁹。

(2) 事業

保育問題研究会では、研究会の部会活動の「実践的研究の一つとして」、また「財政的援助の目的」のため、紙芝居作品の刊行を企画した¹⁰。しかし、実際に刊行されたのは、奈街三郎原作、高澤圭一絵『海へ流れて行つた靴』(1937.10)と、奈街三郎原作、前島とも絵『タンポポの三つの種子』(1938.7)の2作品のみであった¹¹。このことについて、堀尾青史(1972)は、「保問研の紙芝居は、資力のなかったこと、販売組織がなかったことで、実際刊行は二点にとどまったわけですが、紙芝居はいつも研究面と生産販売面が両立できず、苦しい運動をつづけた」と述べており¹²、当時の苦労の様子が垣間見える。

『海へ流れて行つた靴』の刊行に際しては、「皆さまの多方面のご研究によつてこそ段々立派なもの

になるでせう。どうぞ御手近の幼稚園、託児所に御推奨の上実験の報告を知らせて下さい」と述べていることから¹³、創作された作品を研究途上のものと捉え、保育現場での実践を踏まえて、より良いものにしてほしいという様子がかがえる。しかし、作品を継続して刊行することはできなかつたことから、会の「財政的援助の目的」は果たすことができなかったと言える。さらに、保育問題研究会では会の事業収入を得るために、紙芝居・人形芝居・童話の幼稚園等での実演も実施していたが¹⁴、『保育問題研究』の事業報告への記載がほとんどなく、会の収益になかなか結びついていなかったと考えられる。

また、保育問題研究会では、児童研究の専門家と保育の実践家とが協力して毎月1回例会を開催していた。その中で、紙芝居に関しては「言語」の問題を扱う第五部会の中で議論が深められた¹⁵。

例えば、1937（昭和12）年11月25日には、発行されたばかりの『海へ流れて行つた靴』が取り上げられ、「話し方」「取扱ひ方」や、これを材料とした研究法が松葉重庸によって語られている¹⁶。さらに、1938（昭和13）年3月15日には、川崎大治原作の紙芝居『三輪車』について、原画を描いた宇田川種治から説明があったが、相互批評の結果、「明るさがない」「筋が幼児向きでない」「幼児にはモンタージュ技法が判らない」「描かれてゐる子供たちの表情が深刻すぎる」「あまりに現実的である」「もつと単純化されてよい」等の意見があったため、結局、発行を中止している¹⁷。その一か月後である1938年4月30日には、幼児紙芝居第一輯として発行される『タンポポの三つの種子』に関して、「原作、脚色態度、繪畫、説明の全般に亘り検討」が行われ、これをもって完成とし、印刷に回されることになる¹⁸。そして、「今後の研究課題は児童の中で如何に使用されたかの報告、その効果の測定等を豫定して」とあり、保育問題研究会における紙芝居研究の関心が作品の創作から実践研究に変化する様相が見てとれる。

このように、紙芝居に関する研究会活動は保育問題研究会の事業と関連した発行作品の検討が中心と

なっている。保育問題研究会についての詳細な調査を行っている松本園子(2003)も指摘しているように、これらの作品が実際に発見できれば、保育問題研究会の紙芝居研究についての詳細がもっと明らかにできるであろう¹⁹。

(3) 紙芝居観

保育問題研究会では紙芝居を保育教材としてどのように捉えていたのであろうか。『海へ流れて行つた靴』を発行した際には、「この紙芝居は、先生だけがやつて見せるものではなくて、幼児たちもやり、一回きりだけでなく、何回もやれるやうにして頂きたいと思ひます。幼児たちの遊びの道具として使用させ度いのです」とあり²⁰、紙芝居を保育者が与えるだけではなく、子どもたちが演じることによって教育効果があがることを想定していたことがわかる。また、「幼稚園・託児所という社会的な集團生活の場面を考へる時、紙芝居も此の「整理された環境」に對應して、教具としての機能を十分に果すやうに配慮されなければならぬ。(中略)今後の方針としては、作品の主題は研究会の保育主題に従ひ、特に生活訓練を中心に取上げて行く」とあるように²¹、保育教材としての紙芝居の機能が配慮され、作品の主題としては生活訓練を取り上げていくことが述べられている。

また、研究会における議論の末に『三輪車』の発行を中止した後には、紙芝居の中心生命を“絵”であるとし、「[コドモノクニ][コドモノヒカリ]等の高級繪本で定評ある童畫家に、研究的に會の活動に参加して貰ひ、藝術的な優れた繪畫を発表して行く」という方針が述べられているように、紙芝居の芸術性を追究しようという姿勢が見える²²。一方、紙芝居の演劇性については、重要性を認識しながらも理解するには至っていないとし、東童の宮津博を招いて話を聞く様子が見られる²³。

このように、保育問題研究会では、紙芝居の絵や演劇性を重要視しながらも、実際の作品制作としては試行錯誤を重ねている段階であることがわかる。

そして、保育現場においては子どもたちの「遊び道具」としての活用を想定する一方、生活訓練を伝える手段としても紙芝居の役割を考えていた。ここで見てきたように、保育問題研究会での紙芝居の出版は必ずしも成功したとは言えないが、保育者と協働しながら作品を議論していくという先駆的な方法は、後の日本教育紙芝居協会での活動に大きな影響を与えていると言えるであろう。

3 日本教育紙芝居協会

(1) 概要

日本教育紙芝居協会は、1938（昭和13）年7月に松永健哉らによって設立された組織である。理事長に帝国大学講師・大島正徳、常任理事に恩賜財団愛育会の安原清太郎、大島長三郎（劇作家・青江舜二郎）、理事に東京女子高等師範学校教授・倉橋惣三、劇作家・久保田万太郎ら学者や文化人のほか、文部省社会教育局青年教育課長など行政関係者らも名を連ねている。

設立の目的は、『教育紙芝居』創刊号（昭和13年9月）「日本教育紙芝居協会規約」に「本會ハ教育的紙芝居ノ普及發達ヲ圖リ、文化國策ニ積極的参加ヲ爲スヲ以テ目的トス」と記されているように、紙芝居の普及と紙芝居を通じた文化国策への参加である。また、「創刊の辭」で以下のように述べられている。（下線は筆者による）

一、紙芝居は誰にもやれます、どこでもやれます、何時でもやれます。そして費用は安く、脚本の種類は無限に近く配給は迅速です。これが紙芝居の大衆性です。

二、紙芝居は子供にも大人にも、文化程度に拘らず面白いものです。社会教育にも、学校教育にも、家庭教育にも、教科にも、教授にも、宣傳及娯楽にも、びつくりする程の効果をあげます。これが紙芝居の教育性です。

三、しかしこれらは紙芝居の現状ではありません。現状は多くのなげかはしいものを持つてあ

ます。本協会は、かゝる紙芝居の現状の改善と共に、独自の理論と技術によつて、文化国策の一翼に逞しく参加することを目的として生れたものです。

いつでも、誰でも、どこでも手軽に演じることができるという「大衆性」や、年齢や文化水準に関わりなく、広く人々の心に訴えることができるという「教育性」を紙芝居の特長としてとらえていたことがわかる。こうした紙芝居の特質からかけ離れた現状を改善し、「独自の理論と技術」をもって紙芝居を通じた文化貢献を意図していたのである。この目的を達成するための協会の事業は、次の三つの柱からなる。紙芝居の制作、紙芝居の普及・啓蒙活動、そして研究調査である。次節では、それぞれの活動について詳述していく。

(2) 事業

①紙芝居の制作

紙芝居は、「国策紙芝居」、「教材紙芝居」、「幼児紙芝居」の三つのジャンルごとに制作が行われた。作品は頒布用あるいは貸出用として協会にストックされ、毎月『教育紙芝居』の紙面上で、「貸出作品目録」として、タイトルや簡単なあらすじ、場面数が紹介されている。

創刊号の「協会当面の事業」のなかで、「猛烈な希望に完全に沿ふためには、本協会の在庫作品の十分なる用意が必要です。そのために今年中、各種紙芝居の新作を約一百種つくります」²⁴と、作品制作の意気込みが述べられている。紙芝居の普及・発展のためには、街頭紙芝居とは質的に異なる、協会「独自の理論と技術」に基づいた紙芝居作品の制作が急務だったのである。

翌月の誌面には、「現代児童文學界の第一人者、榎本楠郎氏が幼児ものに力腕をふるつて下さることになりました。貸出新作品がどしどし出来ます故、雑誌發表後の新作品はご紹介下さい」²⁵とあり、新たな制作協力者を得ながら、着実に新作を増やしてい

る様子がかがわれる。その意気込み通りとはいかないまでも、『教育紙芝居』が創刊された9月時点では7冊だった幼児紙芝居が、2か月後には10作に、1年後には26作品になっている（表1参照）。

作品名を追っていくと、当初、「幼児紙芝居」のリストに掲載されていた『一年生』や『二つのランドセル』といった作品が、のちには「教材紙芝居」に分類されるなど、貸出状況や子どもたちの反応等を踏まえながら、リストの見直しも行われていたことがわかる。

②紙芝居の普及・啓蒙活動

こうした制作を支え、普及に大きな役割を果たしたのが、会の趣旨に賛同し入会した会員であり、支部組織であった。紙芝居の貸出は会員に対してのみ行われ、会員が5人以上集まって支部を組織すると、数々の特典が与えられた。

「協会の支部が出来ますと、種々の特典があるばかりでなく、全国の支部は本協会組織の母胎となるべきものものですから、早く設立するやうねがひま

す」²⁶と、支部を組織することを創刊号から積極的に呼びかけている。支部には、規則や事業計画を立てることのほか、子ども会の開催や講演会、研究会、作品の合評会等の事業を行うことが推奨されている。支部に与えられた特典は、補助金の交付、会員間における貸出作品の流用、講習会や座談会等の開催における協会講師の派遣、協会刊行物や宣伝印刷物の寄贈の4点である。

「本年末までに四〇〇〇人の会員を獲得したいと存じます。さうすれば八百萬の観衆に影響を興へるのです。文化國策の線に沿うて活躍する我々教育紙芝居の同志が、全国のすみずみまでに散在してこそ、國民文化の向上も進展もあるのです」²⁷、「一人の会員が十人の新たな会員を獲得し、以てわれらの実践網を打建てることこそ、教育紙芝居の成長発展のための切實な要件である」²⁸という言葉からもわかるように、一人一人の会員は紙芝居の実演者であり、紙芝居を通しての文化向上、社会貢献という協会の目的の具現者である。紙芝居は実演されることによって初めて意味をもつ。多くの人に紙芝居を通して感

表1. 幼児紙芝居 貸出作品の推移（表記は原文による）

1巻1号 (1938.9)	1巻3号 (1939.11)	1巻4号 (1939.12)	2巻9号 (1940.9)
カミナリノコドモ オヤツ マリちゃんのはくろ 一年生 忠犬ジョン 二ツノランドセル 少年探偵エミール	カミナリノコドモ オヤツ マリちゃんのホクロ 一年生 忠犬ジョン 二つのランドセル スベリダイ 白くなつた鳥 赤いマスク マツチ賣りのマリーさん	カミナリのコドモ オヤツ マリちゃんのホクロ 一年生 忠犬ジョン 二つのランドセル スベリダイ 白くなつた鳥 赤いマスク マツチ賣りのマリーさん シログマとサケ けがをした犬	カミナリのコドモ オヤツ マリちゃんのホクロ 忠犬ジョン スベリダイ 白クナツタ鳥 赤いマスク マツチ賣りのマリーさん シロクマとサケ コザルノイタヅラ オサルノラツパ オヤマンブランコ あひるの子 がまんづよい兵隊さん ヂンボン時計 ウミベノナカヨシ ビスケットトアリサン スズメトネコ ろばとお百姓 カナリヤエウチエン バナナヲツンデポツポツボウ コリストミカツキサマ プレーメンの音楽隊 ナカヨシコウサギ ヒヨコノサンボ 小猿ノ恩返し

動を与えることこそが、教育紙芝居の成長発展につながるのだと考えていたのがわかる。

4000人の会員獲得を表明した協会だったが、実際はどうだったのか。堀尾青史(1972)は「初期の活動は肉筆原画の貸出しという貧しいものだった。教材、童話の類を紙芝居化し、それを地方の教師へ貸出すわけだが、往復の送料と使用料を自分で負担してまで紙芝居を見せるというのは、よほどの人だから微々たるものである」²⁹と初期の状況について述べている。しかし『教育紙芝居』誌を見る限り、会員数は順調に伸びていったように思われる。「山形縣東村山郡支部が出来た。清野孝童氏の肝入りである。」「大分縣では別項のやうに縣が積極化して来たが、南海部郡では柴田正氏が同志を糾合して、縣南普及教化に乗り出すことになつた」³⁰等々、各地で結成された支部の紹介記事が毎号掲載されている。支部のメンバーを見ると、小学校の教員が中心となっているが、「福島縣石川支部」は石川教育部会長を顧問とし、町役場の職員や女学校の教員も名を連ねている。また、「大正大學支部」のように大学の児童教育部の学生が主体となった支部も結成されている³¹。

1938(昭和13)年11月には、国策紙芝居『貯金爺さん』が「大蔵省より各府縣に配付のため大量買い上げの命を受く。以上の他特別の後援があり、本協會員には特價九十銭」³²という記事がみられる。大蔵省(現：財務省)はじめ、その他の団体から資金提供や便宜が得られるようになり、会員に利益が還元されるほど、経済的にも安定していったことがうかがわれる。同年10月時点で会員数は700名と記されているが、1940(昭和15)年の7月には、「この半年の間に、新に入會される方が非常に多く、會員數も、一年前に較らべると、約五倍以上と云ふ盛大さです」³³とされている。時流に乗り、国策紙芝居が牽引する形で会員数が増加していったことがうかがわれる。

協会本部はもちろん、各支部もそれぞれ出張実演や、実演技術の向上をはかるための講演会や講習会の開催、幼稚園や託児所、小学校を訪問しての実演

や慰問団の派遣などの奉仕活動を通し、紙芝居の普及につとめている。日本教育紙芝居協会が、子どもだけでなく大人も紙芝居の聴衆対象としていたことや、保育問題研究会の会員数が保育者を中心とした100名ほどであったことを考えると、紙芝居の普及・啓蒙において、協会の影響力が大きかったことをうかがい知ることができる。会員たちの活躍によって、低劣、俗悪、非教育的等々と批判された街頭紙芝居の印象は、急速に払拭されていく。協会創立の翌年には、次のように述べられている。「正しい紙芝居論が、今や樹立されねばならぬ。これまでの紙芝居に関する論議は、(中略)判で押したやうに、その「低俗なる存在」をいかにして厄介払いするか、といふところに止つてゐた。(中略)だが、この数ヶ月間にわが同志たちの活躍によつて、情勢は一變した。われわれが機會ある毎に説いてきた「紙芝居の無限の大衆性」とは、單なるお題目でないことが、現實に立證され、識者の紙芝居に対する態度は急轉回を見るに至つたのである」³⁴。1939(昭和14)年当時、紙芝居の現状が改善されつつあったことがわかる。

③研究調査

研究・調査活動は、制作や実演指導の基盤であり、それぞれの活動が相互に支え合い、循環し合つて進められていた。

『教育紙芝居』の1巻3号(1938年)には、教材紙芝居研究会と幼児紙芝居研究会の開催予告が掲載されている。「本會設立趣意書並に規約に示す處に従ひ、教育紙芝居の藝術的研究並に理論と實際の研究をなし其の編輯製作実演指導の權威或る研究會たらしむべく左記により開催。(中略)幼児紙芝居部 幼児向教育紙芝居の編輯、作製、批評に関する會合を開催。廣く兒童藝術家にして幼児教育紙芝居に關心を有せらるゝ諸氏、幼児保育の實際當事者各位、兒童研究者諸氏を部員とし顧問には倉橋惣三先生をお願いしてある」³⁵。教育紙芝居の藝術的研究および理論と實際の研究を進めるため、教材紙芝居研究会と幼児紙芝居研究会が月に1回定例会を開い

ているほか、座談会も開催されている。

幼児紙芝居研究会は倉橋惣三を顧問とし、保育者や研究者、実作者が参加して、熱心に研究が進められている。次にあげるのは、研究会報告である。
(下線は筆者による)

浅草、日限日曜学校での幼児研究会は四・五歳から尋常五・六年、入口は母達で塞がれるといふ盛會。「オヤマノブランコ」「オヤツ」「アヒルノ子」を相次いで實演後鈴木景山氏が児童感想を聴取して印象の調査をした。³⁶

秋第一回の研究会を箱崎幼稚園で開いた。實演「カケツコシタカゼ」武田雪夫作。「新ちやんととんぼ」「虎ちゃんの飛行機」川崎大治作の新作三篇。今度の研究会は参加者にも記録をとつて頂いた。そしてそれを研究会席上で作品別に整理し、脚本に、繪畫に、實演に、子供の觀察にそれぞれまとめて発表。そこから問題を取り上げて行つた。³⁷

これらの研究会報告にみられるように、研究会では毎回紙芝居の実演が組み込まれており、子どもの反応調査に加え、脚本や絵画を含む作品批評、実演の仕方や研究方法の議論等が行われている。実際に子どもに演じてみると、制作側の思いに反して、それほど効果がなかったり、逆に思いがけないところで喜ばれたりすることが多々あった。川崎大治も述べているように「理論だけの研究ではなく、実際に與えてみての研究が大切」³⁸であり、理論と実践の往還のなかで研究がすすめられていたことがわかる。

同様に、視聴者の反応を重視する姿勢は、「實演所感」欄を設けているところにも現れている。「實演所感」には、各地の会員が実際に演じた感想が寄せられている。山形県の会員、富樫直は次のような文章を寄せている。「オヤツ異様な人気を呼びまして殊に一年生にもしましたところ、非常に喜ばれまし

た。忠犬ジョン託児所の子供にも一年生にも程度が高かつたと思ひます。幼児用としては童話めいたものがよろしいと思ひました」³⁹。また、銚子高女生が農繁期託児所を慰問したときの所感では「托児所の幼児に與へるものは、生活上親しいものを材料とし、極めて簡単な内容のものがよかつた様に思ふ」⁴⁰と、紙芝居の具体的な内容に踏み込んだ感想が寄せられている。こうした所感は、まさに「幼児紙芝居研究のよき参考」⁴¹になったであろうと思われる。

紙芝居研究は、紙芝居が保育現場に普及していくのに伴い、より多岐にわたった研究が必要になっていった。幼児紙芝居部から発展したと思われる保育研究部では、1940(昭和15)年に、6作品を1組とした「保育紙芝居」の頒布をてがけ、翌1941(昭和16)年には、「保育と紙芝居研究会」として、より規模を拡大した「保育と紙芝居」の連続研究会を開催するにいたっている。以下に示すのは、その報告記事である。

私共はいま所謂紙芝居を凡ゆる角度から検討研究して、これを子供の世界における權威ある文化財として正しい地位を占めるものたらしめなくてはならない。

そして、この紙芝居の研究は、傳統的な所謂社會現象としての、それへの關心、保育用具としての機能の研究、創作させる試み、藝術様式としての基礎理論、脚色、繪畫、取扱ひ演出等多方面に亘つてゐるので、今後一々の研究を進めて行くために、連続研究会を開くことになつたが、その第一回研究会を、倉橋惣三先生及び川崎大治氏の御盡力により、さる四月廿六日、東京大塚の女子高等師範附属幼稚園に於いて開いた。⁴²

この研究会は、日本幼稚園協会との共同主催で4月26日と、翌5月31日に開催され、初回は約50人、2回目には約150名の幼稚園教諭が出席したと記されている。紙芝居が保育現場に広がりつつあったこ

とを示しているとともに、この時代、非常に熱心に、また多面的に紙芝居研究が行われていたことがわかる。

(3) 紙芝居観

では、日本教育紙芝居協会は紙芝居をどのようなものとしてとらえていたのだろうか。言説をたどっていくと、保育問題研究会と同じように、保育教材、芸術性というキーワードが散見される。しかし、日本教育紙芝居協会という芸術性とは、単に絵が芸術的であるといったことではないようである。たとえば、倉橋惣三（1938）は次のように述べている。「紙芝居といふものをその特有なる印象力に於て内容傳達の効果的道具であると見るのみならず、もつと紙芝居そのものが、その特有の本質に於て生じて来る意義を考へる必要があるのではあるまいか。（中略）紙芝居の内容的教育的効果以外の教育心理効果は目と耳とが助けあふというのでない。もつと本當のところで一つになる。」

倉橋のいう「本當のところ

で一つになる」とはどのようなことか。倉橋は、紙芝居は話だけではわからないことを絵が補い、絵だけではわからないことを話が補うというようなものではないと断言する。そして「もつと本當のところ

で一つになる」とはどのようなことか。倉橋は、紙芝居は話だけではわからないことを絵が補い、絵だけではわからないことを話が補うというようなものではないと断言する。そして「もつと本當のところ

で一つになる」とはどのようなことか。倉橋は、紙芝居は話だけではわからないことを絵が補い、絵だけではわからないことを話が補うというようなものではないと断言する。そして「もつと本當のところ

4 おわりに

以上、見てきたように、二つの研究会は組織力や商業的な成功という点では大きな開きがみられた。保育問題研究会が100名ほどの会員にとどまり、事業収入を得るための紙芝居や人形芝居の実演も思うにまかせなかったのに対し、日本教育紙芝居協会は、会員を全国へと広げ、支部を組織し、出張実演や講演会・講習会を開催し、幼稚園や託児所、小学校を訪問しての実演や慰問団の派遣など、さまざまな活動を通して紙芝居を広めていった。まさに、「この数ヶ月間にわが同志たちの活躍によつて、情勢は一變した」⁴⁶と自負するほど、低劣、俗悪と批判されていた紙芝居のマイナスイメージを払拭する原動力となっ

たのである。もちろん、それは戦争という非常時において、国策紙芝居が牽引しての成果であったともいえる。日本教育紙芝居協会を語るとき、戦争責任は免れない。しかし、その半面、幼児紙芝居に視点を移すと、非常に真摯に幼児にむけた紙芝居について研究し、議論し、制作していたのも事実である。それは、あまり作品として結実しなかったとはいえ、保育問題研究会においてもいえることである。

二つの研究会において共通するのは、読者である幼児の心理や反応をなによりも重視し、実践を踏まえた研究・制作を行っていたこと、また、保育の教具としての機能、芸術様式としての基礎理論、ドラマツルギーなど多面的に紙芝居の研究を進めていたことである。これらの幼児のための紙芝居に対する熱意が、幼児紙芝居の質の向上と、保育現場への普及を推し進める力となっていたと思われる。保育問題研究会が行っていた、保育者と協働しながら作品を議論していくという先駆的な方法は、日本教育紙芝居協会でも引き継がれている。全国の会員から寄せられる「実演所感」を大切に、幼児紙芝居研究会においても、必ず紙芝居の実演を組み込み、絵や脚本、効果や演技方等、保育者も含め大勢で多面的に協議しつつ、実作と研究の往還のなかで紙芝居論を深めていっている。

現在、紙芝居がおもに活用されているのが、保育現場であることを考えると、この時代に協議され、作成された幼児の紙芝居が何を生みだし、何を現在に残したのか。また、保育教材としての「系統性」とは具体的に何をさし、その「系統性」はどこまで実現されたのかといった問題とあわせて、もっと検証していく必要があるのではないだろうか。現存している当時の紙芝居が稀少なだけに、難しい問題ではあるが、今後の課題としたい。

- 1 東京市社会局 (1935)『紙芝居に関する調査』p.40
- 2 鬢櫛久美子 (2007)「幼児教育・保育の先達と紙芝居」(『子どもの文化』7・8月号、2007) p.18 これらの説の根拠になっているのが、日本保育学会『日本幼児保育

史 第4巻』(フレーベル館、1971)の「昭和7、8年頃から「人形芝居」(人形劇)や「紙芝居」が多くの園で行われる様になり」という記述である。

- 3 上地ちづ子 (1997)『紙芝居の歴史』久山社 p.49
- 4 高橋五山 (1960)「ででむし」『せいくらべ』2号 p.4
- 5 詳しくは、拙著 (佐々木)「保育における紙芝居をめぐる言説－紙芝居の導入時期と紙芝居観の変遷を中心に－」(『東京未来大学紀要』2016)を参照のこと。
- 6 内山憲尚 (1947)「談話の偏重について」『幼児の教育』47巻 p.9
- 7 川崎大治 (1940)『季節保育所の経営及び其の実際』p.130
- 8 『保育問題研究』第1巻第1号 p.25
- 9 『保育問題研究』巻末収載の会員名簿より抜粋した。
- 10 [無署名] (1937) 囲み記事 『保育問題研究』第1巻第1号
- 11 この他、刊行が予定されたが未発行の作品には以下のものがある。

川崎大治原作、宇田川種治絵『三輪車』

※1938.3.15の研究会での批判を受け、保留となる

川崎大治作、宇田川種治絵『お猿さんの赤い毯』

※検討を終え、印刷所に回されたが、発行されず

塚原健二郎作、木俣武絵『迷子になったボン』

※「小蟹の遠足」として、戦後別の出版社から刊行

槇本楠郎作、前島とも絵『仲なほり』

※槇本の原作だけ残っている

- 12 菅忠道・松葉重庸・堀尾青史 (1972)「東大セツル・保問研からのレポート」子どもの文化研究所編『紙芝居 創造と教育性』童心社 pp.308-309
- 13 [無署名] (1938)「幼児のための紙芝居」囲み記事『保育問題研究』第2巻第1号 p.18
- 14 [無署名] (1938)「事業活動」『保育問題研究』第2巻第1号に、「既に本誌創刊號に於て研究會の財政的基礎確立の為に特別なる事業活動をなし、これらの事業活動によつて得る報酬を研究會の事業収入として繰入れる計畫を發表して置いた。特別なる事業活動とは(中略)幼稚園・託児所内の子供會其他季節的行事催物に参加し、紙芝居、人形芝居、童話などを實演する活動であつた。」(p.30)とある。
- 15 保育問題研究会の第五部会における研究活動につい

ては、浅野俊和（2004）「戦時下保育運動における「幼児文化」研究—「保育問題研究会」第五部会と第六部会を中心に—」『児童文学論叢』第10号が詳しい。

- 16 〔無署名〕（1938）「研究會報告 第五部会」『保育問題研究』第2巻第1号 p.25
- 17 松葉（1938）「研究會報告 第五部会」『保育問題研究』第2巻第4号 pp.25-26
- 18 菅（1938）「研究會報告 第五部会」『保育問題研究』第2巻第5号 p.19
- 19 松本園子（2003）『昭和戦中期の保育問題研究会—保育者と研究者の共同の軌跡／一九三六—一九四三』新読書社
- 20 〔無署名〕（1937）「海へ流れて行つた靴」囲み記事『保育問題研究』第1巻第2号 p.18
- 21 事業部（1938）「紙芝居について」『保育問題研究』第2巻第4号 p.29
- 22 注20に同じ。
- 23 〔無署名〕（1938）「研究會報告 第五部会」『保育問題研究』第2巻第6号には、「子供に童話、紙芝居、人形芝居を與へる時、又、子供等の遊びの中から取材してそれを醇化し劇化せんとする時、如何に私共がドラマツルギーに無智であるかは屢々嘆じてゐる」（p.22）とある。
- 24 〔無署名〕（1938）「今年一年の製作」『教育紙芝居』1巻1号 p.5
- 25 〔無署名〕（1938）「會員へのお願」『教育紙芝居』1巻2号 p.14
- 26 〔無署名〕（1938）「支部のつくり方」『教育紙芝居』1巻1号 p.16
- 27 〔無署名〕（1938）「協會當面の事業」『教育紙芝居』1巻1号 p.5
- 28 〔無署名〕（1938）「卷頭言」『教育紙芝居』1巻2号 p.1
- 29 堀尾青史（1972）「戦中における教育紙芝居運動」

- 子どもの文化研究所編『紙芝居 創造と教育性』童心社 p.316
- 30 〔無署名〕（1938）「支部結成」『教育紙芝居』1巻4号 p.23
 - 31 〔無署名〕（1939）「支部結成」『教育紙芝居』2巻2号 p.23
 - 32 〔無署名〕（1938）「國策紙芝居」『教育紙芝居』1巻3号 p.5
 - 33 〔無署名〕（1940）「本部から」『教育紙芝居』3巻7号 p.25
 - 34 〔無署名〕（1939）「卷頭言」『教育紙芝居』2巻2号 p.1
 - 35 〔無署名〕（1938）「本部通信」『教育紙芝居』1巻3号 p.16
 - 36 〔無署名〕（1939）「研究會メモ 二月幼児研究會」『教育紙芝居』2巻4号 p.28
 - 37 〔無署名〕（1939）「幼児紙芝居研究會」『教育紙芝居』2巻10号 p.18
 - 38 川崎大治（1940）「新作を巡る座談會」『教育紙芝居』3巻8号 p.7
 - 39 富樫直（1938）「實演所感」『教育紙芝居』1巻3号 p.11
 - 40 篠原政子（1939）「托児所を廻りて」『教育紙芝居』2巻7号 p.8
 - 41 〔無署名〕（1939）「お姉さんの紙芝居 銚子校女の慰問隊」『教育紙芝居』1巻3号 p.6
 - 42 〔無署名〕（1941）「保育と紙芝居」研究会『教育紙芝居』4巻5号 p.26
 - 43 倉橋惣三（1938）「紙芝居の心理」『教育紙芝居』1巻3号 p.3
 - 44 松永健哉（1940）「新作を巡る座談會」『教育紙芝居』3巻8号 p.14
 - 45 砥上種樹（1942）「幼児紙芝居の問題」『教育紙芝居』5巻3号 pp.4-5
 - 46 〔無署名〕（1939）「卷頭言」『教育紙芝居』2巻2号 p.1

（ささき ゆみこ・あいざわ きょうこ）

【受理日 2016年10月26日】